

子どもが話したら分化強化します。つまり、子どもは要求した物を受け取りますが、話すこともすればもっとたくさん受け取るわけです。

理想としては、子どもには、文カードを作り、交換し、それから〈読み返し〉の時にパートナーに向かって言葉を言ってもらいたいのです。これを促すには、日頃慣れ親しんでいるルーチンが完了するのを、多くの子どもは見たがることを利用します。文カードを読んでいる時に間を置くと、子どもがこちらを見ることがよくあります。つまり、言葉を待っているのです。黙ったままでいると、多くの子どもが言葉を自分で言って〈空白を埋め〉るのです！ あらかじめ遅延時間（普通は3～5秒）を決めておき、トレーナーは望ましい行動が出るのを待ち、次の言葉をプロンプトし、流れを完了させます。

具体的には、パートナーは、文カードを子どもの方に向け、子どもが最初の絵カードを指差すのを待ってから間を置きます。そして、〈ください〉カードを指差すのを待ち、「ください」とパートナーが読みます。間を開けた時、子どもの発語が始まるのがよくあります。もし子どもが言葉を発したり、言葉に類似した音声を発したら、赤飯ものです!! 3～5秒待っても発語がなければ、パートナーが言葉を言い、要求したアイテムを渡して交換を強化します。この方法とともに分化強化を使うよう気をつけましょう。子どもがしゃべったら、強化子を大いに〈奮発〉します（アイテムの量を増やしたり、アイテムを使える時間を長くしたり、たくさんほめたりして）。発語がなくても、強化子は与えます。私たちと効果的にコミュニケーションをとったからです。

理想的な形としては、次にパートナーは、子どもが文カード全体を「読む」ように促します。その際に、文カードを子どもの方に向け、子どもが強化子のカードを指さしながらその言葉を言ったら、子どもが〈ください〉アイコンを指差すのを待ち、間を置いて「ください」という機会を与えます。話すことをコントロールするものは、最初は絵カードを指差すことであり、後には文カードを子どもの方に向けることのはずです。



PECSでは、話すことを絶対に強要してはいけません。PECSは、子どもにとって受け入れやすいコミュニケーション方法ですが、子どもが話したり言葉をまねたりするまで要求アイテムを与えないと、子どものコミュニケーションは台無しになりかねません。これは子どもを欲求不満状態に陥らせるでしょうし、十中八九その子どもとのコミュニケーションは途絶えてしまうでしょう。このときPECSでは、分化強化を行ないます！ 子どもは交換はするが話しはしないという場合でも、要求したアイテムや活動は与えるべきなのです。しかし、もし子どもが話した場合は、もっと多くのアイテムを与えたり、もっと長い時間、活動することを許すのです。

エラーレス学習:

- 順行連鎖法を使って文カード作りを教えるときには、子どもが文カードに間違った順序で絵カードを置くことがないようにします。しかし、文カード使用の初期に、子どもがたまに間違っても、心配はいりません。文カードの向きを変えて読みあげるときに、そっと絵カードの順序を直します。子どもの年齢を充分考慮しなくてはなりません。左から右への順序は、ごく年少の子どもにとっては発達的に難しいので、絵カードを正しく配置させようとするのは妥当ではありません。とはいえ、これは左から右への流れを教えるには、すぐれて機能的な場面です。
- 子どもが、強化子の絵カードと〈ください〉絵カードとを、たびたび逆の順序で文カードに貼る場合、間違った順序で絵カードを貼った文カードを手渡したら、何が欲しいのかわからないふりをして、絵カードと文カードをコミュニケーション・ブックにもどします。これは、子どもにとっては、エラーを修正するための〈自然な合図〉となります。
- 子どもがこのエラーを続けるようなら、これは連鎖課題上のエラーです。従って、これには、バックステップを使います。

エラー修正

連鎖のエラー： バックステップ：

これは、文カードを組み立てる手順の中で正しく行えた最後のステップまで子どもをもどし、それ以降の手順をすべてプロンプトすることです。多くの子どもにとっては、これは試行の最初にもどることを意味します——文カードから絵カードをはずし、絵カードをブックにもどし、それからプロンプトして、まず強化子の絵カードを取らせ、それを文カード上の正しい位置に貼らせませう。そうして、強化子を、ただし少な目と与えてこの構成作業を分化強化します。この後は、正しい手順で文カードを作ることを教えるために、すでに述べたように十分に身体プロンプトを行ないます。

文カードを正しく作ればうまくいくのだ、ということを子どもは習得する。